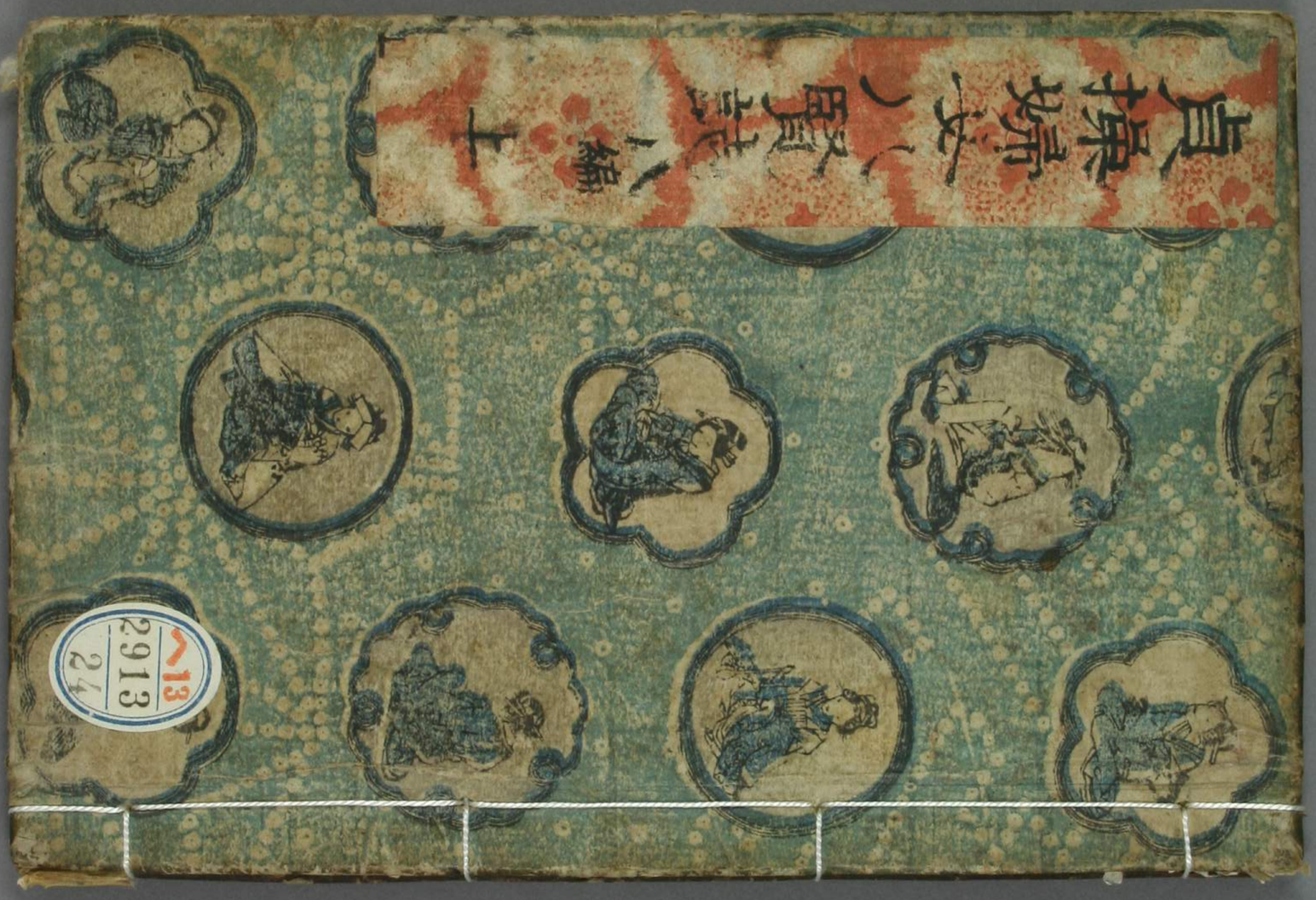

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Centimetres
Inches

村田

貞操婦女八賢誌五輯下映紙

虛談ハ邪說暴行なるべき戯作圖家を
善巧方便と云ひ莊子ハ名けて
寓言といふ稗史小說又ハ戯作
這婦女八賢誌も夫まで
どこまでも着ぐるふ優ようにまとで

へ 2913 24
昭和九年七月六日

童蒙の為に繙きて或は木盆印地
打の悪戯に戯れ易んまん作者の本意
此上あらん始め余が翁這書を作りて
諸君の愛翫を得ること年あり僕故翁
の業を慕ひて編を次ぎ更に
遮莫平生あらんを期して爭

何ぞ遠く言でるの事なるの編
既に刻成て書肆まで端書を乞
責む因て是等の數言を書る況
看官嘲ると嘲ざるや

千時弘化五戊申歳春如月

東都柳北軒 為永春水 ㊞

烈婦八代
岩鞍典物

岩鞍
泡之助

貞操婦女八賢誌

東都　爲永春水編次

第四十七回

玉兎雲を洩て大六醉を尽さ
山猫草を出て一夫谷ふ轉ぶ

當下處女い爲羽玉ふ妹お有女と呼びうけら是打狹きしら呆ぼーしら爲羽玉ゞ顔を須臾見つめて居らしら伝男ひけん懷より守代袋を取り出し私を妹と云仰を疑ふ思てハひとねども別是ーとき私ハ五才至ひに顔も見おぼえぬを照据もうくて姉妹の名告をきた

何と申し公に疑ひなきゆゑ改めてぜひ真お前の妻さんなら
是見おぼえてごさんせうと言ひつくさー出を守袋をふ
だも取らを爲羽玉が完全と咲いく小勝を找めたれとそ
覺の漢錦中に八你が誕生せー年月日時を父爺さんの
自筆で書てひらふのと言ふ見て歡ぶ件のお有女偖ハ
お前が妻さんお懐しやと身を寄せて取つく勝へ爲羽
玉ハお有女を引寄せ侶俱ふ袂を顔へおー當て嘻ー泪に
稍須史言話もなくて泣ぬひを道理と見てや大六も二
婦をのらり慰めつ夫よりお有女を俺家ふ止め爲羽玉と
侶俱ふ何不足なく暮さーふお有女い其性怜悧のみ
容貌さへ艶ーくぞ夫のみにあらずして糸竹の乙舞の
ものまで怯らうねば大六もよき者を得ようとて夜と
なく日となく酒酌ハー觀ハせもしろ舞ハせもしろひさ
ぎ爲ふ爲を借まとも尚色好みの辭ハ止まで人をあ折を
見合せてハお有女をとらへて種こふ言話巧みふ言ひ
寄まどもお有女ハ奈何なる心ふや將ふ對して嫌ぎ
ぞぞぞぞよきやどふ言ひて更ふ心ふ為さくねど口先だけ
ア八大六が氣ゑ入るやうふのとなるまぬど其情欲い果ね

ども余とてお有女を疎ましく思ひ其中に
分時々心ふあさぐんと時節を俟りて大六いろいろ心を
通ぜせける却説日数を経るやどふ肆月も暮まて五月
雨の降を降りぶと晴間なき或夜ひとくふ宵月の松ゞ
枝洩りてこぼれ新の景色ふ色て大六い例のお有女と烏
羽玉を石と花アふ仕ら世ら眺ひる庭の夏草ふ露うと
ぞうり初螢新最清き泉水もうの逸水を取り込ミー其
あ上へ何所も岩根松ゞ根流ま来て這所ふ景色を造
庭花とそ名け是若葉せー樹々の梢も一入と奥ふ茂りて

大六いろいろふ志ふ心緒を倍ふ募ひる烏羽玉お有女弧
奥を添んとそ烏羽玉ハうの琉紫琴を仇音高く將
探せばお有女ハ近頃世にもてはやす三弦をきん取りさー
ぞへ〳〵侍ふ弾ぶ侍ふ分ま岩ふ妙ふ浮〳〵立
ら是大六いふも更ふ身に添ひぬ訛ふる声を張ひげて
調子も合ハね雑唄を風ひら舞ひら又飲ふ盃の数重
なぶ泥のごとくふ酔潰ま竟ふ席にも絶うねて傍に
ゐり〳〵烏羽玉の膝を枕ふうちゐ〳〵果ハ鼾とうふける
四辺見まハ〳〵烏羽玉ハお有女と顔を見合せて俱ふ笑ふと

打咲つ計りにて有女太郎まぬとや大六めハ死人も同
前此間ハ速く片付てと言ふをお有女がおゝ止めお声が高い
と羽玉さまハ四下ハあ氣をト言ひうけて縁て准備の麻
索を懐よりして取り出し前後もあらば酔ゐるうの大
六が首を二筋三筋引まハし力を究めて絞ひるゆゑ狭き
咽ぐ大六が叫と一声立んとすゝ口へ扶を爲羽玉がまぢる
当て推つゝまぶ死敷やな大六ハ苦しき声を立るゆゑ嬰
時も豆を動かせゝが忽地呼吸ハ絶ゆけり二個ハよくく
見届てして吻と洩はる溜息も余所を憚る口の中其
時お有女ハ言葉をひそめ縁てお前のおゝ人ゆゑ女子安と
身をやつし名さへ有女と呼更てお前の味と偽りて此家の
月々此家ハ養ひまてハ居るものゝ這大六が居るゆゑに
稼ハ會夜も仇意ぐら丈うふいと悪心の出しもそんな
お前が可愛さとハ言へ這奴を殺しては此処ハ長居もあり
ぐゝお前ハ家裡を掠さぐゝ駄へ垂ける金銀を咸残り
ゝ取ひ門ゆ財布へ入まて持ちぬへ丈女盤纏ハ這家を
立去り何まの里ゆも身を忍び夫婦和合よく暮しま
ゝ私ハ其間ハ這奴が死歟日外ゝゝ見て垂さ納戸の

中の古葛籠へ入れて此侭泉水へ投葬せるもせあての
追善他目のくらぬ其うちに速く〳〵と促せば・アイ合
点でどざんせと言ふもいそ〳〵爲羽玉は奥の一室へ忍び
ゆき勝手なる金箱より取り出せる金の袋を二ツの
財布へおさめて以前の一室へ立戻れば丈助有女太
郎は納戸の葛籠を取り出しうの大六が死骸を速く
入れて泉水へ四下見まはし突流せば名ある関へ流る逸水の
早瀬のあに押流さるを浮り沈むの川下へ見る間に見えず
ありふける其事果て有女太郎は爲羽玉と伯俱に身繕ひ

きえそうくに二ツの財布を一ツづゝ二個が身につけ庭口より
豆ぞうりんとなる時はしも子の刻ごの変なれば下女も下
男も寝あがりて初る者絶てなきのみを月迄雲に入間
なる世を逃水の此里を逃るまうてど走り行く徒て二
個は大六を男へが侭に欺きて殺せしのみを賭への金を
落さ〳〵取出しまへば盤纏に不足はなれども尚も
遅隊の蒐らんうと後ろ見るく蔦人の太きいも細り
ゆ〳〵夏野が原の糸芒風ゆも胸の揺くにどあきりの
急ぎくさして行べき当はなけれど一且此地を遠ざか

夕もぐみ
なる歌
男の
ちりふけて

何里の里ゆも落着て其後京を料らんと夜を日のつぐで
行やどゆ幾日もひらで秩父なる岩鞍山へぞ参りけるとの
山い武州第一の高山にて峰ハ波濤を連ねーぞく山
又山ゆ最深く見おろし溪の岩清水千尋の底ゆ听へ
俤く咀の松風吹交て谺ゆ郷音く猴の声腸を断つぞり
る則ぬ山路ゆ只二個友呼子鳥史るるで覚束なくも
辿るゆぞ励まさまゆく爲羽玉も屋まりて居る有女大郎ゆ
身さえ足さえ労まーくび須臾憩ひ住んとて片辺ゆ
ひよ松の根ゆ二個ひとーく腰うち掛け膝ゆぞさとる爲

羽玉ゆ顔まーー覗き有女太郎い感ゆうねりくうち舎嘆き
嫌て覚期のうゆゆうら斯る山路ゆ行ゆやをお豆い痛
ハ爲まゆぬゆ足這所まゆ迦延て八最早追隈のゆ
遺ひゆーー這山ひらゆ越行くび里ゆる方へ出まゆう今宵ハ
开里ゆ病借りて枕を高く休らハんおゆ強く思ーゆ
言ゆ是て秘ぶ爲羽玉い最咲しー氣ゆうち奥頂候今野ゆ
卧山ゆ深て草を枕ゆ做をとも二個同処ゆ居るるくば
色ゆ倍る嬉ーハ又ひるべくも思ハねを恐まを私をの
ひとて感めゆゆ其お言話有ぐさぞぎて勿休ゆい私ハ

左もの足右もの足お前ハ洋いつ着も別ぬ女衣裳の其
儘で逃けき途の日せるとれ嘸や心地反くるんと言へ
お前のそのお粧装男子と初めて私ゝき人実の女子と
思ふの那大六が欺きて私の妹とおのふもホンニ蚤
理でハどざんせねと言ひつゝ舎ゝとうら笑へば信ぬ懐ひ
有女太郎も才ふ憂苦せつゝ足草准備の火打取り
出して吸付莨も惇りの関ふ人目のなふざるべ互ひふ
洋ゝ身のうゝ糸の秘るをき人言ひ出て要時譚合折り
ゝそふ足傍ふ茂りゝ夏草を右と左ふおゝ分ゝなれ

出る怪ゝき獣惣身毛ゝ毛を生ゝ眼ハ星を散まるごとく
口ハ耳の根まで裂ひゝり赤き舌き人吐出せるもの形容山
猫ともいへべきゝ二個の後ろ人遠ひ寄ゝりの烏羽玉を撥
ふ去ぶんと走るふ旋きて吐嗟と叫ぶ烏羽玉より有女
太郎ハ驚る天ゝて変化の形勢をよくも見ぢ躱ゝ携
なる懐剣を抜より速く砍てゝるを件の変化ハるも
せべ左辺右辺あぐゝ掌り遠へ躍り蒐ゝて有女太郎が
襟髪掴んで投出せば幾十尋なる谷底へ落び落ゝて
其体ふ生死も判ぢるふけり夫と見るより烏羽玉ハ

更に生きる心地せぬと其怖しきまで悲しきに身を投る人て
動うねを那山猫ハうち見やりて徐く側へ我を寄り處女よ
介のまる狹きぞ俺ハ素より変化あらぬ先正躰を見せん
と身に纏ひまる獣の皮と冠りし面を取退るハ山猫の
んと思ひのかの年齢五十才ばかりにて容貌きえ怖氣多
大の男でなかりしかば鳥羽玉ハまさに驚きてハ什麼いふ
と思ふまを胸うち狹くなりにてまさに詮術もなかりぎり
ちを伴の男ハ感めて舌咲をなら復言ふ俺が恁く
異なる打扮を怪しく思ひんが素より俺ハ盗賊

なるぞ這山の麓なる岩鞍村の郷士にて岩鞍典物と
嘯まるる知術指南を做ぬ者なるが籍なる思ふより
あまべ世の豪傑に田會自方にあるまんと思ふぞ斯る
怪しき形勢を做し往来の客を狹りしその強弱を
試さんと日毎夜毎に這辺りに躭まる人を俟ひやぶる
俺が俟人ハ出會ぬ今日ともおん身ハ何がの松
陰に憩らふて身のうに話しを徨閑しにおん身に真の
處女ぬて今一個なるに處女ぬならば物の言ひざまなと
やらおん身と情出ある拵子にて人を害して立退しを仔細ハ

かねど言話の端々顔の似合ひ大膽不敵の少年
を俳者なれども其強弱を試せしうち品に寄りて自方
なる一大事なも明さんと思ふて甲斐なき那奴が柔弱で
一投に谷底へ投落されては那奴が不運其身の微力を悔
まず海も我に恨ハなるべきおん身い渠が渾家にあらず
那奴が妻ハ思ひ絶今より俺に身をまかせ側妾となれハ
なるべきなれども時ハ栄花ハ仕次第倘我が言話を
聞入れず不の字を言ひ色非が多い那少年を本に
なるおん身も深谷へ真逆さまに斯しても否ならば応の回
答を聞くんと言ひつも年齢に似氣なき典物が言
話の端を巧みなる

第四十八回

岩城山の典物一妾を得る
林一の里に烏羽玉旧夫に會ふ

再説烏羽玉ハ思ひがけなき典物が言話に又も胸潰
怖き悲しき取り交て須臾回答もならざりしが意の中に
憐れ那有女さまとハ鎌倉の舘にありし其日より
互ひに思ひ合ひ一念が通じて昨今女夫となりし
甲斐もなく現在良夫を谷底へ投殺されて其離を

今目の前に措き難き女子心の甲斐なき撃戈恨
いねのみなるべし側妾に為まとそるるまんや此身は深
谷へ投落さるる良夫と倶に死ねばとて爭でこの身を
縛さるべき答へじやとと胸に向ひ腹に応へて一回は
覚期をせーがイヤヤ他今今更死ねばとて冥府で
良夫に會ふ中又會まぬ中も知まも世ね未来の
事を当みて可惜命を捨うとて誰が此身を貞
女と誉ん歟ありとて離ありとて此身をきえに任せ
命を度存世て楽しきるもまさるべし命の門を

獨り種と世の譬にも言ふものを死なんと思ひ世ありしは
俺身なりも野暮なりし然うやうと身勝なる
道理を立る浮薄の本性忽地完分とうち咲まて
田舎遅しと侯うけるかの典物に打ひ思ひ出げ
貴君のお言話ふいね私を分やどを不便と思いて
下さんを其おれが妻ハ側妾ハ水仕女で
此身に厭ひどぎりまる世ね私が古郷ハ鎌倉にて人に
知り見ー市客の獨廃女にて結りしを今谷底へ投
落さるー那少年に哄誘さる親も家も打捨て

鎌倉の地を欠落し武蔵の國府に落着しに那少
年は顔に似氣なく心よろぬ人なりしを最初はあらで
別深しと武蔵へ来りし十六日より那処は繁花の里なる
ゆゑ深き夜陰を窺ひつき女子形容に身を変て數の人を
欺きつゝ多くの金を奪ひ取りしものなりて顕はて
縛ひ捕らるゝ時は窃に相ゝ刺殺し亦那地
にも夜逃ふして今日此山まで落延び重ね重ね悪行に
私は敏うら毫相が尽倘此後にて連添ふ後には此身も
如何なる憂目に會んも料られねば縁を切らんと思へ
ども家出せし身は今更に鎌倉へとても帰られぬ他に
寄る辺もなき侘に悪人なりと知りながら阿容くことに
俳なれば一欺さんと身の悪さを最口惜く思ひしに料らず
貴君の名を借りて那悪人を失ひしに疫病の神を拂ふ
なる地せられて嬉しきに尚這身を棄られぬは
情深きお言葉は地獄で會しに佛に倍て尊く
歓ばしき其報ひは此身を粉に微とても厭はず
這う糸は左も右もおん身の隨意這身を粉に
料られぬと口に信せて自他と言葉巧に言ひくるめ

身の非を飾る詐りも真しやらふ関りるゐぞ那典物ハ
疑いぞ屡咲とくうち点頂儲ハおん身ハ鎌倉より遥
少年ハ敷うを這辺へきゐよひ来りしう余ハ言へ今ようり
俺ハ身を寄せ側妾とるらばおん身の果報今の歎きハ
引換て了に栄花の身とるべし何ハ兎も角を這所ハ
山中言ふべきるも関くるも俺家ハ行て徐りとせん
卒とたうハ身を起し嫌ての相婚と思しくて母子の
留を吹立るべ四下ハ茂うし夏草を那方這方と神
分て現ゐを出るる強漢子甲乙惣て五六名先生首

尾ハと言ひ放ら右と左ハ立並ぶと典物見つ打矣て
余を得物ハひらねとも是見よ恁る義ハしき雌
鳥ひとをを入るう今宵ハ渠を着ハして夜と
倶ハ置酒せん汝等山路ハ氣をつけて大るの處女ハ
怪我なると言ひつ先ハ立やどハ五六名の漢子ハ
郷ハ典物が脱棄し面と皮とを拾ひ取り肩ハ掛つ
爲羽王をいさうり又感めつ家路をさしてぞ急ぎけり
却説爲羽王い心ハ快くらねども岩鞍典物が側妾と
るりしハ素より奸智の白者ゆゑ典物が氣を速らも

稽り秀の
つるる
脾
猫の妄

知りて痒き所へ届くるの表面だうハ真心ハ朝夕身
辺を去ることなく媚を重ねぞ仕ゆる程ハ年ハ似れる
典物ハ渠が色香ハ迷ひてや日夜ハ寵愛弥増て
二ゝき者とぞ思ひける余程ハ烏羽玉ハ或日湯浴を
儆んとて一名の侍女を伴ひつゝ此やど新ハ造作し
風呂場にいりて衣脱ぎて湯を浴垢を流ぎ折も
風呂焚漢子と思しきが湯口よりして顔さし出し
お湯の加減ハ奈何ぞや冷ゝんば焚ん熱んばまた水さし
まわらせんと言ふ声聞て烏羽玉ハ何者ぞやんと視ゝる
ときに互ひハ顔を見合せれば是則別人なりけり鷲に
武蔵の逃水にて締殺しつゝ早川へ蒐籠ハ入れて
押流せし那大六ハ流石浮藻の烏
羽玉も吐嗟とだうち狭ぐ心と侶ハ顔色の変
るを見せじとて拭ハおし繰しても繰さるゝ身ハ
居風呂の湯氣ぞうで消も失せ男のこゝ又詮
術もなうざるべ伴ひ来りし侍女にハ公地反しを
仮りうくとくハして風呂よりいでゝ頭て母屋にいり
あが那大六がるゆ氣ハうくまば左ハ右胸の安うくば余ハ

言へ渠は去る日は殺して川へ流せしが生て這辺に居るべき
やうなし。と俺が心の迷ひにて渠が形容の目に見えしやうに。
思へば大六が以前の扮装でなるべきは衣装風俗も零落
下女は齋しき孩子と言ひ此家の風呂を焚居るなり
いろいろの用に合点ゆかぬ問ば仔細の具なるべんと其夜
主の典物が部屋に入りて折を覗ひ話流の次に烏
羽玉は何坊なれば表言へやう最前貴君のお言話には
這回新しき造作して那居風呂に入りて見よと誘ひ
私は取次の人に待女ひとりを伴なひて湯殿に行
風呂焚く漢子と思しきが私が形容を見ん
為に湯口より顔さし出し這方を折て覗いしば
何と申さん公地よりなにとなく渠は
素より狂気人々なれば色好きの漢子にや惟谷なる
者ぞと問うまでも典物閑なうち候ひ渠は完狂人
なれば色を好むより好まぬは我なるもの知らねども
那者の変は然て又一条の除説あり憑て益なき
るまでは縛の仔細を言ひ度らせん日外おん身は出
會ひし其前の日の夜明ごろ呼用なるよりと

岩鞍峠をうち越て武蔵野の原を通りしき片
へ辺に流る早川の岸に茂りし芦の根に流れうり
葛籠ひろう中に入れば物やらわれども物様の重氣に見
ゆるゆゑ伴當等に吩咐て引揚させて見る麻
索をもて貫を締る男の死骸でありしゆべよりしき
るを為てけりと腹立しまに打棄て往んとせしを伴
當が空脅おろしを口惜がり せめて這奴が着物を脱せ
革袴倶に市に賣ふべ脅折代に呈らぶとも酒の肴
直うちはらうん須臾其呼ゆゑを侯に言へ伴の
伴當は死骸の側へ我を寄り常も着物も脱せうと
首に纏ひし麻索も葛籠も倡に奪て赤裸
せし死骸をば再び川へ流さんと呈を飛しく腹腹を
蹴る人を豆先自ら活の法を施けん伴の男は
蹴られし侭呻と一声喚びしが忽地蘇生して四下
見まわし忙然と狐の放されし唖方のごく逃も得去
らぬ徨をしを色はと驚く伴當より俺们は胆の潰るまを
倡に呆まを居しうしが肚裏に思ふ様俺伴當の慾に
ふけり些の銭をうとめんとて料らぬ這奴を生せしべば

俺も人倶に疑いて後の禍のみを言いまじ左も右にも那男を生て置てハ寐覚よろしゝ殺さゞ如ぞと思ふゆゑ刀抜くゆゑ最早く覚期をせよと呼びうみて砍りて蒐るを左辺右辺と身をくゝり那男ハ周章て声をあり立て刀倫須臾候の人下奴將ゞこゝ命ゝ君の恩蔭ゆ助ゝ~~添きに恩も有ものを假令裸ゆ苦ゝ~~も辛ゝお恨をゆ人を頼ゆハ今より君ゆあゝゞ今日の恩恵を報ハんゝゆ草履ゝ~~も抗ゝ~~這義とゆ許容ゆとゞて念ゝと倶ゆ力ゆ

お絶ゆゝゝゝて行きませゆゝ嘯くと言ゆゝも双の仆に
ゆを合せ卿ゞ~~く勸解にゞ流石ゆ双も当ゝれて優
俺家ゆ伴ゝひく這回新ゝゆ造作ゝ~~風呂賛役をゞ
吩咐ゝと一伝一什を譚るを関て狡く烏羽玉ハ狗安
つゞ思ひける噫烏羽玉が一世の浮沈死せゝ男ゝ
大六ゆ料ゝゞ面を會せる其後甚麽ゝる変やゝる开ハ
ゝ次の巻ゆ解分ゝを看てゝゝん

村田